

構 造	柔細胞 (μ)	50-80×65-96	50-80×65-100	40-65×55-80
	粘液細胞 (μ)	70-110×95-145	75-105×100-155	42-70×65-95
	柔組織内層部の束晶 (束数)	3~5	1	1
	タンニン様細胞	有	無	無
	シュウ酸カルシウムの集晶	無	無	有

以上のことから、漢葉半夏はカラスビシャクの塊茎と組織構造が一致するものの、現在の本邦市場の水半夏と称する生薬はニオイハング、カラスビシャクの塊茎とは形状、構造等で異質であることがわかった。尚、その基源については更に検討中である。

(津村研究所)

○ムントビラは小笠原島に野生しない (津山 尚) Takasi TUYAMA: *Pittosporum bicarpellatum* Nakai et Tuyama never found wild in the Bonin Islands

ムントビラは小笠原島に野生していたこともなければ、現在野生している証拠もないと結論した。この件に関しては、この学名を出版した年 (1935年) から数年後に、以下に記述したほど詳しくはなかったが、ある程度文献的に結論を得ていて、オーストラリア産の *Pittosporum undullatum* Vent. の東京における栽培品を誤認して小笠原島産としたものと確信した。このことは友人にも伝えていたので、仲間の中では常識となっていた。しかし、このことを文章で発表していなかったのは、筆者の怠慢といわれても異論はない。今ここで、*P. bicarpellatum* の出版前後の事情を記し、本種を *P. undulatum* の異名として正式に発表するのがこの小文の目的である。先に筆者がこの件に気がついていたと記したが、何しろタイプ標本が押葉にされたのが明治10年代のことであり、証拠をもって論断することは大変困難なことであった。

1934年の末か、1935年の初めに筆者は指導教官の故中井猛之進教授から後述の標本を示されて、これは新種と思われるから記載したらどうかとのすすめを受けた。小生はそれまで何回か小笠原島で採集していたが、この標本と同種と思われる植物を同島で野生状態でも、栽培下でも見たことも採集したことはなかったのである。それを新種として発表するようにすすめられた時に、一瞬ためらったことを覚えている。先生は極めて俊敏な人柄で、君がそうに疑うのならば、この植物が小笠原島野生のものであることに自分が責任を持つから、君と共著にして発表したらよいではないかと発言された。こうまで言われて、師の好意と信頼を断ることがどうして出来ようか。かくして、先生と筆者の連名による唯一の学名が発表されたのである。1935年6月のことである。先生は

この植物が自生と信じておられたし、筆者にもかってこの植物が自生していたことを疑う積極的根拠は全くなかった。

タイプ標本は果実と花の2枚の標本で、*Pittosporum undulatum* Vent., *Pittosporum pauciflorum* Hook. et Arn. シマトベラ、トウソヨゴ Jun. 16, 1879 小笠原島と故松村任三教授の手で書かれたのが花のあるタイプ、*Pittosporum undulatum* Vent. Aug. 25, 1878 と故矢田部良吉教授の手で書かれているのが果実のタイプである。これらの標本作成時の習慣では、採集者名、産地の詳細がラベルに書き込まれることはなかったし、それで充分と考えられていたのである。

学名発表の当時、小石川植物園の温室にこの植物と同種と認められるトベラ属の鉢植が一個あった。鉢は径 20 cm 以下で、植物の高さは数 10 cm くらい、花をつけていたのを見ているが、これを新たに押葉にすることははばかられた。なお当時の事情で、筆者はオーストラリアから *P. undulatum* の標本を取り寄せることもしなかったし、また属のモノグラフも出版されていなかったで、この植物の正確な知識にとぼしかったことも事実である。

ムニントビラが外国で研究の対象となったのは Mari Gowda 氏の *The genus Pittosporum in the Sino-India region* (Journ. Arn. Arb. 32: 323, 1951) のみである。同氏はこのモノグラフの中で、東大の標本は自らは見ず、筆者の記載文を簡略化して登載し、*P. bicarpellatum* の独立種としての地位を消極的に認めている。

検証 1. 松村教授の小笠原島採集旅行。先生は 1879 年 (明治 12 年)、矢田部良吉教授に同伴し、園丁取締席内山富次郎氏を随えて、同年 3 月 3 日東京発、同 6 日小笠原島の父島二見港に入港、同 12 日に東京に帰着した。先生は簡単な日記を残されたが、トベラ属関係の記事はない。本誌 17: 116-118, 1941 の筆者の調査を参照のこと。

検証 2. 松村教授の旅行日程と押葉製作日時との食い違い。この点は上記のラベルの日時を比較すれば明らかである。しかし、小笠原島で生植物を得て、東京で栽培した後には押葉にしたとすれば矛盾がない。ただし、矢田部、松村両先生が小笠原島で採集し、露都ペテルスブルグに鑑定を乞うて送られたすべての副標本は東大に保存されているが、これらに関しては、上記の旅行日程と、ラベルの上の採集日時との間に矛盾がないことに留意する必要がある。またトベラ属の標本はペテルスブルグに送られたという証拠は先方および東大側にはない。

検証 3. 文献上の調査。明治初年の東京大学関係の植物目録を調べて見ると、トベラ属関係は次のとおりである。

1877 (明治 10) 小石川植物園目録。内地産のトベラのみを記録。

1884 (明治 17) 松村任三: 日本植物名彙 (第 1 版), *Pittosporum undulatum* Vent. トウソヨゴ (原文はタウソヨゴ、以下同様にあつかう)。産地の記載なし。

1886 (明治 19) 帝国大学理科大学植物標本目録。トベラのほかに「シマトベラ 小笠

原島」の記載あり。

1887 (明治20) 帝国大学植物園植物目録。トベラのほかに「*Pittosporum undulatum* Vent. シマトベラ, トウソヨゴ」の記事あり。産地は示さず。

1895 (明治28) 改正増補植物名彙 (第2版)。トベラおよびトウソヨゴを記し、産地は示さず。トウソヨゴの学名 *P. undulatum* Vent. の学名にはアンダーラインがあり、序文中の凡例によって外国産であることを示している。

以上の文献で「小笠原島」が産地として出現するのは1886年の文献のみであり、その後の文献からは「小笠原島」が消失している。

以上3種の検証の中1, 2はタイプ標本が小笠原島で採集されたことを疑わせるものがあるが、積極的に否定するものでもない。1895年の文献は松村教授のこの種の最終的文献であるが、そこにトベラ属関係で「小笠原島」が産地として脱落している。筆者は松村先生が産地を意識的に抜かれたのではないかと考える。

東大の資料館にある標本にはかつて小石川植物園にあった標本も含まれている。また別に小石川植物園にもそこに固有の標本がある。これらの中、トウソヨゴまたはシマトベラとされている問題の標本を通覧して見ると、これらは全部同一種である。これらに関して、矢田部教授は一貫して小笠原島と結びつけていない。一方松村教授は一時期に産地を小笠原島としている。筆者の結論は次の通りである。松村教授は一時期に豪州産のトベラ属のものを小笠原島産と誤認された。これが中井先生の心証に焼きついて、問題の植物を小笠原島産と確信された。

なお、*P. undulatum* Vent. は1800年には Paris の Cels のガーデンで栽培されていて、その年に命名された。その前後にはこの植物はインドなど熱帯で広く栽培された。小石川植物園に輸入されたものは多分原産地のオーストラリアから直接にではなくて、上述のような他所で栽培されていたものの再輸入品であると思われる。上述の文献はオーストラリアに言及していない。もう一步推論を進めるならば、シマトベラの島は台湾を示したこともあるから、その方面から輸入された可能性もある。

もう二つ書いておきたいことがある。矢田部、松村先生の時代には小笠原島の現地人または他の人が小笠原島でトベラ属に限らず植物を採集し、東京大学に送った事例は筆者の知る限り全くない。もう一つ、小笠原島、父島の清瀬には戦前に林業試験場に所属した試験地があって、多くの南方植物を上海、シンガポールなどから輸入栽培していた。ここに *P. undulatum* があった可能性があるが、小生は実際に見た記憶がない。この試験地の成立は松村先生の時代より遙かに後のことである。

最後に中井・津山の採用した新和名ムニントビラは本来はムニントベラとすべきものであった。牧野先生が言われたように、トベラ、トビラノキの称呼はあっても、トビラという命名の伝統はないからである。

* * * *

Pittosporum bicarpellatum Nakai et Tuyama in Bot. Mag. Tokyo 49: 448, 1935 was published as a new species endemic to the Bonin group in the north-western Pacific. At the time of publication, both of the authors believed in the data of the labels attached to the two sheets of specimens cited under the description. One label on the fruiting specimen reads as 'Aug. 25, 1878, Bonin Island', and the other label on the flowering specimen 'Jun. 16, 1879' written by the hand of the late Prof. Jinzo Matsumura (1856-1928, then Assistant Prof.) and the late Prof. Ryokichi Yatabe (1851-1899), respectively. Both professors have botanized the Island of Chichijima of the Bonin group in March of 1879.

Several years later, after the publication of the new plant, I became suspicious of the correctness of data on the labels after consulting with Prof. Matsumura's diary, thorough research of the specimens concerned that are deposited in TI, and old literature such as 'The List of Plants of the Koishikawa Botanical Garden' 1877 and later similar publications until 1895. After more detailed and difficult reexamination of all that concerns, I now came to the conclusion that Prof. Matsumura might have mistaken the plant in question as collected on the Bonin Islands at least temporarily for several years before he indirectly corrected the locality for the plant in his last book in the same line as mentioned above in 1895. In fact any botanists or plant collectors have never collected the plant on the Bonin group up to the present. As early as in 1884, the plant was already cultivated in the greenhouse of Koishikawa Botanic Garden by the name of *Pittosporum undulatum* Vent. It should be confessed that we had not fully checked the identity of *P. undulatum* when we proposed the new species.

Pittosporum undulatum Vent., Jard. Cels. Pl. 76, 1800, Gowda in Journ. Arn. Arb. 32: 320, 1951.

Pittosporum bicarpellatum Nakai et Tuyama in Bot. Mag. Tokyo 49: 446, 1935, **syn. nov.**